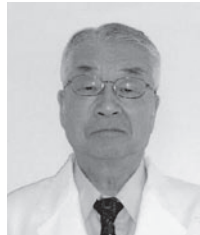


諸々の思い出に学ぶ

日本癌病態治療研究会 特別会員

辻 公美



人生を便宜上区切ってみると、小生は今、第4の人生を歩いていることになる。第1は大学入学まで、第2は医学生、第3は医学部卒業後の研究・教育・診療の時代、そして第4はすべての公的立場から退いた医師としての人生。W' Waves に数年前に駄文を載せていただいたが、今回は自分自身の頭の体操のため筆をとった。御叱正、御批判ください。

Science Base の立場；

移植とがん免疫との出会いから

1) 細胞免疫と胸管リンパ球採取

1964年7月、デューク大学の故 D. Bernard Amos (DBA) の研究生となり2~3日たって「君は外科医だから、ハツカネズミの胸管カニューレーションをしてTリンパ球を採取しろ」との指示を得た。マウスを開腹し、下行腹部大動脈に沿って走る胸管に、顕微鏡下でビニールチューブを挿入し、胸管リンパ液を数日間にもわたって採取するものであった。

T-ology の始まりの頃でマウス胸管リンパ球を採取したのは、Gowan が最初に成功し、小生は2~3番であった。

デューク大学の前は、ペン大病理で病理解剖をやっていた時、故 W. Ehrich 教授から、死体から胸腺摘出を命じられた。その時はまったく胸腺に興味はなかった。帰国後、慶応大で故土屋雅春教授と会い、胸腺大家から色んなことを教わった。懐かしく思い出している。

2) HLA と会う

デューク大学へ移る前、その年の春に第1回 Histocompatibility 会議が DBA 会長で開催されたことは、後になって知ったことであった。従って研究棟では、リンパ球表面抗原の HLA の命名、機能などが大きなテーマで、基礎・臨床の連携で世界中の HLA-ologist が集まっていた。今でも多くの友人と Xmas カードの交換と、時には当地を訪れ旧交を温めている。

現在 HLA はあまりにも一般普及化され、医学・生物学に導入され約半世紀を経て、赤血球の ABO 検査と同様ルチン化し、HLA-ology が無関心ともなっている。しかし HLA 学は、ヒトの免疫応答の基礎として、HLA 拘束性、非拘束性を含め、これからの研究発展に期待したい。

3) がんの自然治癒の今昔

Everson & Cole 著 Spontaneous Regression of Cancer に会ったのは、1967年頃、がんの自然退縮が存在するという Science Base の観察が行われていたことに驚いた。アメリカ帰国後、東京医大外科にいた頃、学内がん研究会で全国アンケート調査を行い数例の SRC を集計した。その後日本外科学会で故森武貞教授が全国調査され報告された。その機序解明が挑まれるところであるが、SRC の各症例は後日になってわかることで、初めに種々の因子を想定して事前の検査を行うことは非常に難しい。がん患者の発症前後の生存防御機構としての免疫応答の詳細な

データ集積が望まれる。最近はがんの免疫療法に関心が集まっている時期で再考を要する。

4) TNMH 分類

最近は、がん対策に社会の関心が深まって来て、行政もようやく重い腰をあげがん対策の見直しに力を入れた。

以前から TNM 分類として普及しているこのカテゴリーも、がんと宿主との両者のなかでがんの方に注目したものである。宿主側の検索因子がほとんど考慮されていない。がんの宿主因子を観察しようという立場から、小生達は Host Factor を TNM 分類に追加する提案として TNMH 分類として提唱した (1994~95)。しかし Oncologist 達は Host Factor にあまり関心がないらしい。がんの免疫療法を行うには Host Factor の導入が切に望まれる。

5) 再生医療とがん治療

再生医療としていわゆる細胞療法としての ES 細胞、iPS 細胞の臨床導入が望まれている。社会環境の対策作りが急務である。さらに宿主側からのがん対策としての再生医療も今後に望まれるところである。

諸々のことから；

Non Scienc Base の点から最近感じたこと

1) Dialogue と Debate

この上記2つの単語はその真の意味の定義は難しい。同じことについて両者間で論じ合うという前提で考えると、dialogue は対話、意見の交換で debate は討論、討議と訳されているが、後者の語源は beat 打ち負かすこととなっている。

さて、今日の日本の政治家 (屋) 達に聞きたい。dialogue と debate を少し勉強しては。多くは言わないまでも、今の日本の与野党の間では debate より dialogue で、日本の方向をやってほしいものである。

2) 日本人の生き様について

何故今日程、いのちが軽んじられ、他人を傷つけることが多いのか。一口で言えば狂っているとしか言いようがない。もうこの辺で、日本の針路を少しでも良い方に変えたいし、変わってほしい。

日本の医療・福祉、看護、介護などは、これで良いのか？ 数えあげればきりが無い。戦後の付けが回って来たとも言える。世も末になってほしくない。対症療法でなく根治治療を切に望むものだ。

3) ノーベル賞受賞者と私

移植関連領域では多くのノーベル賞受賞者がいるが、小生との関係では G. Snell, P. Medawar, D. Thomas, J. Dausset などがおられ、移植の神様であったり、HLAの先輩でもある。

少し話は変わって、日本初のノーベル物理学受賞(1949)の湯川秀樹博士とわが家のことについて。難しい中間子理論のことはさておき、わが家に「ものみなの なかに一つの法ありと 日にけに深く 思い入りつつ 秀樹」の軸がある。父が京大時代にいただいたものらしい。家宝として大切にしている。“科学と心”小生の哲学のもとにもなっている。

4) 旅は楽しい

i) Splendor of the Seaで航くアドリア海、エーゲ海クルーズ

2006年9月3日ヴェニス港をあとにした。Royal Caribbean International社製の1996年就航、70,000トン、乗客2,076人の大きな船である。

イタリア半島とバルカン半島の間のアドリア海を南下、イオニア海を東にエーゲ海のギリシャへ、地中海を眺めて再びアドリア海を北上、クロアチア・ドブロブニクに寄る1週間のクルーズであった。

海の船旅では今まで船酔いで悩まされたが今回は内海のためか、トン数が大きいせいにかまったく揺れはなく快適な旅であった。

バルカン半島はヨーロッパ東南部で、歴史上では旧ユーゴスラビアが大部分を占め、その他は東側のブルガリア、ヨーロッパ側トルコ、南部のギリシャ、アルバニアなどからなっている(図①)。1991年以前の旧ユーゴスラビア(北からクロアチア、ボスニア、ヘルツェゴビナ、セルビア、モンテネグロ、マケドニア)は、古代から多民族が混在していた。ヨーロッパの火薬庫とも呼ばれていたが、現在でもなお内戦、宗教民族問題を抱えている。

古代のバルカン半島の歴史を思い浮かべている間に、イオニア海をまわってギリシャのカタコロンに入港、オリンピアを訪問(写真①)、その後ピレウス港からアテネへ(写真



図① バルカン半島の国々

A: クロアチア B: ボスニア C: ヘルツェゴビナ
D: セルビア E: モンテネグロ F: ブルガリア
G: マケドニア H: アルバニア I: ギリシャ
J: トルコ

②)、さらにエーゲ海のコス島と天候に恵まれ、多くのヨーロッパの人達と仲良くなり、クロアチアへと乗船した(写真③)。

〈クロアチア/ドブロヴニク〉

幾多の悲しい歴史を経て、漁村ドブロヴニクが形成され、さらに15~16世紀に繁栄を極め“アドリア海の真珠”と謳われた。1979年世界遺産に登録されたが、91年からの内戦で損壊、95年内戦終結後、美しい街並みを復興し今日みる世界中から観光客をひきつけている。

天候に恵まれ、街には活気が満ち溢れ、行き交う人々の笑顔は忘れることができない。それにしても、世界の平和の大切さを考えさせられた。



写真① 古代オリンピアのスタートラインに立って



写真② パルテノン宮殿前で



写真③ Splendor of the Sea への再乗船時の入国検査

ii) マサイマラ／ケニアとドバイ／アラブ首長国連邦、UAE

数人の友人からアフリカ旅行は一生に一度は、しかも体が動くうちにすべきだとかねがね言われていた。紛争のないところで（最近では別）東アフリカの1つ、ムパタ・サファリ・クラブに泊まるケニア・サファリの旅をすることにした（2007.夏）。ケニア、ムパタ・サファリ・クラブ（ホテル）に到着して、自分の部屋に入るまでは非常に不安で一部屋は暑く、窓の外には猛獣がいて、水は飲めない、マラリア蚊・毒グモなどに襲われるのではないかと。答えはホテルの設備環境、従業員などすべて素晴らしい一言に尽きる。こんな自然に囲まれた素晴らしい国があるのか、都会の喧騒のなかで生活を送っている者にとっては、夢の世界であった。

この自然を表現することはできない。今後のサファリドライブ、マサイ族訪問、ネイチャーウォークなど夢を膨らまし床についた。赤道直下で猛暑を覚悟していたが、オロロの丘は日本の軽井沢の感じであった。気温は20℃以下。むしろ寒さを感じ、部屋は清潔・暖房、出発前用意した“蚊取り線香”はまったく無用の長物となった。2、3の写真を紹介する。この自然の広さ、深さを写真で表現できない無力を痛感した（写真④、⑤、⑥）。

アフリカの水を飲んだ者はやがてアフリカに戻るとガイドブックにあるが、まさに小生もできれば再びアフリカを訪れたいと願っている。

ケニアの自然と人に別れを惜しみながら、まさに後ろ髪を引かれる思いで西マサイマラ飛行場（建物はなく、航空関係の人もない）から

小型飛行機でナイロビへ、そこからUAEのドバイへ向かった。

ドバイ、ジュメイラ・ビーチ・ホテルに2泊した（写真⑦）。世界中の財が集まり、今世界中で一番活気づいている街というだけあって、ジュメイラビーチの海辺、ドバイの市中いたるところ建設ラッシュで、街を通る人達も金ピカの人達が目についた。石油の力をまざまざと実感した。

石油に替わる、より安価な、強力で安全なエネルギー源の開発が望まれる。今回の旅は、ケニアVSドバイ、自然と人工、素朴と贅沢、生まれたままと深化粧、カネと心など、両極端を見・聞・体験できた旅であった。

第4の人生に入って初めて体験した旅で、改めて世界の平和と自然の大切さを痛感した。



写真④ ムパタ・サファリ・クラブの入口で。ドライバーのヘンリーとイタリアからの新婚夫婦と辻



写真⑦ 43℃ドバイ。ジュメイラ・ビーチ海岸にて



写真⑤ サバンナでの朝食と車の後ろでタチシオン



写真⑥ マサイの村で。後ろに家